京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十七卷　第六號

大正十二年十二月一日發行

論叢

土地課稅新案……法學博士　神戸正雄

價値の量……法學士　恒藤恭

世界經濟の意義……法學士　作田莊一

鎌倉時代の土地制度……文學博士　三浦周行

時論

農民土地愛着心冷却の傾向……法學博士　河田嗣郎

震災と租稅……法學博士　小川鄉太郎

說苑

マルサスの地代論に就て……經濟學士　谷口吉彥

雜錄

アダム・スミスの書簡一通……法學博士　河上肇

「資本と勞働」と「勞働と資本」……法學士　山口正太郎

リカアド經濟論文集の刊行……經濟學士　谷口吉彥

名士の死の心理に關する統計的研究……經濟學士　岡崎文規

附錄

本誌第十七卷總目錄……

時論

農民土地愛着心冷却の傾向

河田嗣郎

一　一般的傾向

アーサー・ヤングは、所有制の魔力は砂礫を黄金に化すると謂つた。洵に其言葉の如く、農民が土地を所有し、これを我物と思ふ心は自らに其土地を愛惜し、これに改良を加へその生産力を培養して、益々農地としての價値を發揮せしむるに至る。これは昔も今も變らぬ所で、人情の弱點と謂はゞ謂へ、事實然るものあるを如何ともすることが出來ぬ。

少しく農民の心情を知る者は、農民が土地に對して熱狂的な愛着心を有するを知らぬ者はない。そして其れは固より主としては土地が農業經濟の據て立つ所の基礎であり、農業生産はこれを隨一の要素として行はれ、農民生活はこれに依て支持せられるからのことであるが、一つには又たゞ土地を所有するといふことが社會に對する農民の地位を高める所以であり、土地を所有せざる

農民ほど幅の利かないものはないからである。更に又一つには農業といふが如き營利以外に趣味を以て行はるべき業務に在つては、これを我が土地と思つて培ひ養ふことに言ふべからざる興味の存するが爲めでもある。

されば昔から今日に至るまで、農業經營の形式には色々の種別があるけれども、自作經營を以て最も有效で有利な形式なりとせられた。又農民の中に在つては自作農民を以て最も健實なる階級となし、地主階級これに亞き、小作農民の如きは、たゞ彼等が土地を所有せないといふだけの理由で、農民としての恒心に乏しく、その農作も亦とかく掠奪經營に陷り易きものと考へられた。即ち恒産あれば恒心ありといふ字義通りに、土地を所有する農民は最も恒産恒心あるものと信ぜられたのである。

然るに最近に於ける我國農村一般の實狀を察すれば、古來行はれたる右の如き信念の大いに動搖し始めたるを掩ひ難きものがある。即ち今や農民一般に渉つて、土地に對する愛着心の俄かに冷却せるを見る。地主は土地を所有することそれ自身を一の荷厄介に考へ、出來得べくんば速かに所有地を賣却して都合に依ては都會地方にでも移住せうかとするやうな傾向が大いに表はれて來たと同時に、自作農や小作人の如きに在つても、昔から彼等は土地慾しさの念に驅立てられて働き、夢寐もこれを忘れ得なかつたのに、今や土地などうつかり買ふものではない、買つて却つ

て大いなる困難に陷る虞あるばかりではなく、日常生活もこれがために壓迫せらるゝことゝなるを免れ難い、農業を繼けて行くかこれを捨てゝ都會に出でゝ小商でもするか、さなくば勞働者になるかゞ已に問題だが、たとへ此まゝ農民として續けて行く事としても、土地などはこれを地主に持たせて置いた方が利口である。と考ふる風の頗る顯著なるに至つた。

斯くて當今一般的に農民の氣風としてやゝ土地を輕んじ甚しきに至つてはこれを所有するといふ事實を所有者自身に於て呪ふやうな傾向すら表はるゝに至り、これを昔時に比較して、否つい五六年前に比較しても、著しく氣風の變化せるものあるを見ないわけに行かなくなつた。それがために農地の價格の如きも、さなきだに現今米價の低落のために數年前に比して著しく下落せざるを得ざる事情あると相待つて、一般的に大いなる下落を示すことゝなつてしまつた。そして農村には農地を賣らんとする供給は年々多くなりつゝあるに、これを買はんとする需要は却つて減少する狀況を呈し、地價は彌々下落せざるを得ざらんとしつゝある。

と同時に又農地の利用の有樣に於ても、此頃米價の低安なるために、あまり多くの資本勞働を投じて土地を集約的に使用するの愚なる所から、やゝ粗放的使用の傾向の表はれて居る所へ、右の心理的理由あるがために、土地を愛しこれを培ひ育てゝ益々生産力を涵養し、その農地としての價値を增さしめんとする風がやゝ衰へて、追々と放つたらかしにする傾向も表はれて來たやうで

ある。これを愛すればこそこれに手を入れこれを養ひもすれ、あまりこれに對する愛着を感ぜざるに至れば、いゝ加減にして放つて置き、たゞ算盤を執つて收支の引合ふ程度にこれを利用するに止めんとする風の生ずるも、洵に止むを得ざる所なりとする。

固より右示す所はたゞ一般的の傾向についてのことたるに過ぎぬから、全國内隨所必ず然りといふわけではなく、地方に依つては依然として土地愛着心の盛なる所もあらうが、それ等の地方はいはゞまだ現今の一般的の氣風に觸れないで、其の意味に於てやゝ事情の遲れたる所たるに外ならぬ。最近一般の傾向としては右の如きことが道へると思ふ。

二　その因て來る所

何が故に斯くも農民の心情が變つたのであらうか、それには色々複雜な理由がある。

先づ第一には現今農民一般が農村生活と農業經濟とに對して大いなる不滿足を感じつゝあり、特に最近に至つて、その不滿の感情の高潮を呈するに至つたことこれである。卽ち私が本誌上にも再三これを論じたやうに、當今農村生活は、文明の都市集中のために、甚だ空疎貧弱なる生活と化し、文明の世の中といつた所で農村に居た分では、殆んど多く文明の恩澤に浴し得ざることゝ、又農業經濟が、資本主義の隆盛のために、これに緣薄き舊式産業として、とかく營利の目的

に叶はず、甚だ爲甲斐のないものとなり、同じく經濟的に働くほどならば、都會の商工業に參加せんとすることゝのために、農民一般に、離村向都の風に染んで來た結果として、土地など所有して、田舍に燻ぶつて居た分では、生甲斐はないといふ風に考へられて、土地の難有味が、昔日に比して大いに減退するに至つた次第である。農村生活が安慰で快適なる生活であり、又農業經濟が安定せる然かも興味多きものならば、農民一般は農村に住ひ農業に從事することを喜び、その基礎條件を爲す土地の所有に對して、大いなる價値を認むるであらうけれども、現今の實狀が右の如くにして、思想上の要求とその實狀とが一致せないことになつた今日に於て、土地に對する農民一般の愛着心の冷却するは、當然のことたらざるを得ない。已に農村に居ることゝ農業に從事することゝに飽きつゝある者に取つて、農地を所有することに、何の意味があり得やうぞ。

そして此の傾向は近時追々と造り成された傾向だけれども、それでも米價が高くて農民經濟にも多少の餘裕のあり得た數年前までは、一方發展主義的な又享樂主義的な思想上の要求のさまで甚しくなかつたことゝ相結むで、更には又都會生活の華美と充實とのまだあまり著しくなかつたことゝ相結むで、未だ多く農村生活に對する不滿を感ぜしめず、土地の如きもまだこれを獲てその基礎の上に自己の運命を建設せんとする希望が繫がれて居た。然るに、先の世界大戰以後駸々乎として襲ひ來つた思想上の變化と、その機會に集積せられた富の力に依り都會生活の俄かに大

いに華美となり享樂的となつたことゝは、他方、農村に於ける米價下落その他の事情に依る疲弊の狀況と相結むで、茲に俄かに、農民の農村生活に對する誇と執着とを失はしむるに至つた。そしてその執着が失はるゝに連れて、土地に對する愛情の俄かに冷却するに至り、その狀特に茲數年來顯著なるものあるに至つたのである。

それに又第二の理由としては、農村內部に於ける事情の變化が、農民心理の上に著大なる影響を與へ、その大變化を見るに至らしめたことこれである。それは謂ふ迄もなく小作爭議の頻發とその解決難といふ事情これである。惟ふに小作爭議なるものは、その起ることそれ自身が、已に農業經濟上に於ける大いなる時代錯誤的實狀と、從て生ずる從事者の不滿との爲めならざるを得ないが、その小作爭議の頻發と解決難といふ事實は、又益々農村の住民をして、その農村生活と農業經濟とに愛想を盡かす原因とならざるを得ない。

小作爭議が諸地方に頻發して、その解決は容易に行はれざるばかりでなく、却つて年々深刻になつて、終には全く拾集すべからざるにも至り、農村に於ける階級的分離を愈々著明ならしめ、階級鬪爭の事實が頗る露骨に表はれて、その鬪爭は經濟關係から引いて政治關係に及び、更に日常の社會的交際にまで波及して、農村には地主階級と小作人階級との、二大敵國が對立するやうな有樣にまで立至つたことは、地主階級と小作人階級とをして、共に段々農村生活を厭ふに至ら

しめた。甚しきは極度にこれを呪ふに至らしめた。農村といふ狹い天地にこんなにして顏を突き合せ乍ら睨み合つて不愉快に暮さんよりは、寧ろ農村を去つて都會の寬潤なる天地に新生涯を開くに若くはないと思はしめるに至つた。斯くて地主はその所有地が父祖傳來の家產であらうと、又自らこれを造り出した財產であらうと、そんなことに頓着して居れるほど問題は呑氣なものではない。たとへ先祖代々の所有地であらうとも、之を賣つて金にしてしまひたい、金にすることが出來なければ場合によつては荒してしまつても苦うないとまで考ふるに至らしめた。そして又小作人側に在つても、こんな厄介な土地など買取つてその所有者とならうよりも、身一つで働く境涯がどんなに安氣で又融通性に富むで居るか知れぬと思ふに至らしめた。斯くて今や両階級とも、土地に對する愛着を失はんとするに至つたのである。

同じ地主の中でも大地主であつて、その所有地が地方々々に纏つて居り、これを直接經營して機械使用に依つて相當收支計算の立つ見込のあるものはまだよい。彼等はさう急速に土地を見限るものではない。然るに中小地主であつて、その所有地を直接經營して見た所で、雇傭勞働でこれを行ふ分では到底引合ふ見込はなく、さりとてこれを自作せんには一家の人々これに適せず、永年の地主生活はその一家をして農業勞働に堪え得ざるに至らしめたやうな者に在つては、事情は甚だ困難である。小作爭議が起らなかつた以前ですら、地主といつた所でその收入はまことに

些少なものであつたが、今や小作爭議に苦められ、年々小作料を低減せざるを得ざる境遇に陷つてからは、此の階級に屬する人々の困難實に見る目もいたはしきほどのものがある。土地を持てあまし、泣くに泣かれず笑ふに笑へぬやうな境遇に居る。それでもその持てあました土地を賣り得るものはまだしもである。その金で都會へでも出て小じんまり暮すか又は小商賣でもする道もある。然るに土地を賣らんと欲しても買手なく、さればとて有つて居ても年貢は取れず租稅その他の公課は地主たるために隨分重くて堪え得られぬほどの負擔たるやうな境遇に在る者は、實に進退共に維れ谷まれるものであつて、座して滅亡を待つ外はない。

然るに翻つて小作人はといへば、彼等は土地を欲しがつて居るやうではあるけれども、又彼等として考へて見れば、土地が他人のもので、これを借りて作つて居る分ならば、租稅とこれに伴ふ公課とは地主が之を負擔して呉れるからそれが重からうと輕からうと其邊に心配はないが、さてこれを買取つた日には自らその重き負擔に任せねばならぬから、たゞ土地欲しさのあまりうつかり之を買取つてその負擔に任じては、收支計算上却つて以前よりも苦しいことになるかも知れぬ。否現時の租稅實際の負擔と地價とを以てしては、土地は借りて用ゐた方が遙かに有利である。たゞ小作料の高いのが困り物だから、それをば小作運動に依り思ふ存分切下ぐれば、それが一番賢明な策たらざるを得ない。從來小農民がたゞ土地欲しさの感情から算盤の桁を外して高い土地を

買取り、重き利子負擔と之に加へて重き公課負擔をしたことが、小農民困窮の大原因であつた。今や賢明なる小作人はそんな愚を繰返すべきではない。どうせ地主階級は大困りに困つて居るのだから、土地は何時かは安くて自分共の手に這入る。手には入らないまでも、今進むでたゞ土地所有といふ名義だけが得たさに經濟上の不利益を敢て忍むでまでこれを買取る必要はない。まして自分共は永久農業に從事するや否や、それさへ知れたものではないに於てをや。と考へられるのである。

すべて斯の如き理由に依つて、今や農地に對しては大地主も小地主も共に寧ろ愛想をつかして居るし、小作人亦多くこれに對して隨喜渴仰の涙を棒げやうとせない。自作農民亦やゝ同樣である。然らば農民一般に涉る土地愛着心の冷却といふ事實は、表はれざらんとするも得べからざる所なりとする。

三　所有の希望稀薄

農民にして多く土地を愛せざること右の如くなるに至り、此の狀勢が更に大いに進むに於ては、一國農產物の生產は漸次減少し、一般的に農業衰微の狀勢を早めて、國民食糧問題の如きが行詰るばかりではなく、工業も亦原料を得るに事を缺いで、十分なる發達を遂げ得ざることゝなるは

明かである。然るに農業を維持し發達せしめやうとするならば、どうしても農民をして土地を愛し地力を惜み、その生産力を彌が上にも涵養するに至らしめなければならぬ。何といつても農業生産に在つては、勞働の力よりも資本の力よりも、主たる働を爲すものは土地の力なのだから、その土地の生産力が疲弊し枯渇するに至れば、農業生産一般の衰頽を將來するを免れぬ。

所が現今農民が土地に對する愛着心を漸次失はんとするにも至りつゝある理由は、上に掲げたる如き諸事情に存するからには、先づどうしても農業一般をして今少しく引合ふ業務たらしめ、營利企業としても世間並みに立行き得るものたらしめるか、さなくば社會經濟一般をして、非營利主義に立歸り、利得本位をすてゝ必要本位のものとなるに至らしめることを要する。此の根本的救治の行はれざる限り、農業の疲弊と農民の衰亡との免れ難きは明かで、然かもその兆候は第一に農民の土地に對する愛着心の冷却として表はるゝ外はない。

次には又現時農村生活をして今少しく都會生活との平衡を得せしめ、文明の田舍普及を圖つて農村生活のあらゆる方面に於ける充實を行ふ必要がある。此の根本的救治の行はれざる限りは、農村荒廢の事實の漸次進み行くを如何ともし難く、然かもその農村荒廢の事實は、農民が土地に對する愛着を失ひ、僅かの誘引に依つて心殘りもなく農村を捨て去ることより始まるものである。

すべて此等は農村と農業との救濟に於ける根本義であるが、さて飜つて小作爭議の解決に就いて攷ふるに、從來その根本解決策としては、小作人に土地を得させる方法所謂自作農制定策なるものが、最も有效な、殆んど唯一の策たるが如くに考へられて來た。これが果してさうであらうか。

若し私が上に論示したやうに、現今小作人は必ずしも土地を得やうと欲せず、これを買取つて土地の所有者となるよりも、土地はやはり他の者がこれを有つて居て、自分共はたゞ十分小作料を安くして貰つて小作をする方が、却つてよく算盤が立ち得ると信じて居るものだとすれば、今國家なり地方自治體なりが、自作農制定を奬勵して見た所で、あまり多くの効果は期待し得られぬものと見なければならぬ。夫れも若し國家に於て莫大の經費を用意し、土地は地主より相當價格で買取つて、小作人には頗る安價に殆んど無代に近くこれを賣渡し、その差金の損失は之を國庫に於て負擔するだけの覺悟と實行方法とを以て事を行ふならば別問題だが、然らずして、小作人にやはり相當代價を以て土地を買取らせんとするものならば、たとへその代價はこれを長期の年賦償還法を以て國庫より又は特殊銀行より貸付くるものとするも、小作人は敢て喜んでその政策に對應せんとはせぬであらう。土地の所有者としてその改良工事を行つたり又重き公課負擔に任じたりすることが、彼等の最も苦痛とする所なのだから、たゞ彼等を土地の所有者たらしむれば、

小作問題は解決するといふ風に簡單に考へてかゝつても、その自作農制定策はよく實行され得ない筈である。實行上の效果を示し得るに必要なる小作人のその政策に對する適應を期待し得られない筈である。

それも昔日のやうに、農民一般が土地に對する熱狂的な愛着心を持て居る時ならば、小作人はたゞ收支計算の算盤ばかりから事を考へるのでなく、他の諸事情より喜むで土地を買取るであらう。その買得るは長期低利の貸付の便法あるに於ては、進むで之を買取るに躊躇せないであらう。けれども今の時勢に於ては、土地を所有したからとて、多く社會生存上の便宜があるわけでもないから、昔のやうには參らない。卽ち例へば今時のやうに選擧權が擴張せられ特に普通選擧制でも行はれやうかといふやうな時代になつては、土地の所有は殆んど多く政治的の意味を持ち得なくなつた。それに又昔は英國などに於て特にさうであつたやうに、又我國に於ても土地を所有するといふことが、社交界へのパッスポートで、土地を所有する者でなくては農村に在つても一人並の取扱は受け難く、常に社會の下流に在つて、慘めな思をして居なければならぬのだつたら、農民はたゞそれだけの意味からでも、土地を得て一人前の男になりたいと考ふるが當然である。けれども現時のやうに一般的に無產階級の幅が利き、無產者たるを以て誇りとし、ブルジョア階級特に地方の小ブルジョア階級に屬すといはるゝことを聊か面はゆく覺ゆるやうな時勢の下に在

つては、そのプチー、ブルジョアたらんために、經濟上の犧牲まで拂つて土地を買得せんなどとは思はないのが人情である。まして小作爭議の盛な所で、階級戰爭の猛烈に行はるゝやうな地方に於て、小作人たりしものが、土地を買取つて從來の敵の階級に同情せざるべからざる地位に入らうなどとは、思ひ設けぬことであらう。

この事情から考ふれば、今自作農制定法に依つて、根本的に小作問題を解決し得らるべしとは信ぜられぬ。然しそが解決せられない限りは、やはり又循環的に土地に對する小作人その他農民一般の愛着心の恢復せらるべき見込はない。斯くては輒ち依然として農業衰微の傾向を如何ともする由なく、時狀はそのまゝに急進して、社會的大困難に到達する外はないことになる。

四　所有制と愛着心

そこで一つ根本的にこの問題を攷へて見たいのだが、一體農民が土地を愛惜するは從來信ぜられて居たやうに、そが自己の所有に屬するが爲めであらうか。わがものと思へば輕し傘の雪といはれるやうに、農民は我がものだからといふので土地に對する愛着を感ずるのであらうか。果してアーサー、ヤングの言の如く、所有制なるが故に砂礫を黃金に化するのであらうか。

世の中が飽迄個人主義的に出來て居て、自分のことは自分でのみ處理し、自己の用ゆるものは

自己がこれを所有し、自己の働は所有制あるに依つて其の效果が自己の處分に委ねらるゝといふ風であるならば、洵に從來信ぜられたやうに、自己のものたるが故に尊く、他人のものなるが故に尊からず、又自己のものとして所有權に依て保護せられないでは、そのものを自己に於て用ゐ、その利用より生ずる利便をも之を自己に專らにすることが出來ぬであらう。

けれども若し社會に於ける一般の生活原理が革まつて、社會的な團體主義的な原理が、個人主義的な原理に代つて確立せらるゝか、さなくとも、個人主義的な原理に右の社會的な團體主義の原理が加味せられてしまつたならば、人々の考へ方や又事物に對する態度も、自ら變つて來ざるを得ないであらう。即ち例へば所有制度の如きも、之を從來のやうに單純な個人主義的のものとせないで、之れに團體主義を加味し、先づ土地の如きものに關しては、その個別的私有制を廢して、これに代ふるに社會的なる團體所有制を以てし、土地はこれを社會の公有となすといふことになつたとすれば、人々はやはり自己のものでなければ之を愛惜せぬといふ心から、土地に對する愛着心は全然これを失つてしまうであらうか。それとも、自己の所有には屬せないでもその使用收益を爲すことは社會がこれを許して呉れ、然かも法制の力を以てその使用收益權を保護し、その使用より生じたる利使はこれを自己に於て享受することを保障して呉れるならば、各個人は喜むでその土地を愛護しその生產力を涵養すること、恰も個別的私有制の下に於けるが如くなる

を得るであらうか。これは洵に大いなる問題である。そして人々に依つてこれに對する見方は異るであらうが、私は後者の場合を信ぜざるを得ない。

なぜかといふに、たとへ現時のやうに、私人的な所有制が一般的に認められ、土地に就いてもその私有制が確立されてあつても、その所有物の利用が十分に保障せられず、その利用より生ずる收得が又十分に保障せられず、從てこれを所有するといふと雖もそはたゞ名義だけのことであつて、殆んど多くの實益の得られない實狀あるに於ては、人々はその所有物に對する愛着の情を失ふこと、上に之を土地に對する現今の地主の態度について論示した通りだからである。更には又人々はたとへその物の所有をこそ有せざれ、その物の使用收益が保障せられ、その使用に依て利得が得られるものたるに於ては、敢てその物を所有せんとは欲せず、所有に伴屬する種々の負擔に任せんよりは、寧ろその所有を握らないで、これを借りて用ゐた方が得策だと信ずること、上に現今の小作人の小作地に對する態度について論示した通りだからである。

つまり之を所有するや否やが問題ではなく、その物が收益のために用ゐらるべき性質のものである限りは、これを使用し得てその使用權の猥りに犯さるゝことなきや否や、その使用より利得が生ずるや否や、その生ずる利得は自己に於て之を享受することが保障さるゝや否やが、より大いなる問題である。人はたゞ物を所有せんがために所有する物もあるが、そんな物は少數の例外

で、大低の物はその使用收益が目的として所有せられる。まして經濟上に所謂「財」なるもの、特にはそが生產の要素として用ゐらるゝものに對して、これを所有するといふことの意義あるは、これに依てこの使用收益が行はれ得、そが所有權に依て保障せられるからである。

そこで今本題に立歸つて考ふれば、現今地主が農地に對する愛着心を失はんとしつゝあるは、これを所有するとも、自己に於て直接に耕作使用することは出來ず、出來てもその收益はまことに少くて、中小地主階級に在つては、公課を引去れば殆んど見るに足るほどのものは殘らず、若し之を小作に附すれば、小作料は値切られ年々小作爭議に苦められ、然かも又土地所有者なるが故に多く社會の尊敬を受くることはなくて、却つて敵視せられるやうな風だからのことたるに外ならぬ。又小作人が土地に對してどうしてもこれを得んとするほどの愛着心を有せざるは、やはり之を所有するとも多く實益の伴ふなきが爲めである。そして小作人として今のまゝに之を借用する分では、その借用上多くの利便は生じ得ないで、收益中かなり多くの部分は之を小作料として地主に持て行かねばならず、之を所有しても之を小作しても、何れも多く難有からず、それがために土地を愛する心も薄き譯合なりとする。

果して然らば、これに對する根本救治の道としては、土地の所有を難有からず考へつゝある地主よりはその所有權を社會の手に取戻し、その人々にはその代りに彼等の領する代價を與へ、以

て彼等を農業關係より立去らしむると同時に、他方小作人にも亦土地の所有を與ふる必要なければこれは與へないで、たゞ彼等にその社會の有する土地に對する使用收益權を與へ、これを法制の力を以て保障することが、唯一の道たらざるを得ないことに爲る。

けれども今私は茲に此等の實行方策について獻策しやうとする者ではない。茲にはたゞ現時に於ける農民一般の土地愛着心が漸次大いに冷却しつゝある事實と、そが社會生活及社會經濟上に及ぼす影響と、更にはその冷却の因て來る理由と、次には又農民の土地に對する愛着心が從來所有制あるがために生ずるものとのみ信ぜられたることの誤れる見方たることゝを論指するに止めたいと思ふ。そしてこれを論示することに依て、これに對する方策は自らに暗示せられる次第で、つまりは土地公有制の行はるべき理由が漸次に備はり來りつゝあると同時に、その實行に依て農業救濟に關する一部分の事業が成就され得べきことは、容易に了解さるゝ所なりとする。

要するに農民一般が、農業生產の隨一要素たる所の土地、農村生活の支持者たる所の土地に對して、漸次著しく愛着心を冷却しつゝあることは、農民一般が農事に對して現今如何に冷淡になりつゝあるかを示すものたらざるを得ない。此點が最も憂ふべき點であつて、農業の衰亡これを因として生じ來らざるを得ない。今にしてこれを根本的に救治することの行はれずんば、わが社會生活一般と社會經濟の前途洵に寒心に堪えざるものあらん。